九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

江戸漢学における『韓非子』の意義 : 諸注釈書に現れた『韓非子』観を通して

横山, 裕

https://doi.org/10.15017/2328447

出版情報：哲學年報. 56, pp.75-93, 1997-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

江戸漢学における『韓非子』の意義

――諸注釈書に現れた『韓非子』観を通して――

横山　裕

はじめに

『韓非子』は戦国期最後の思想家韓非の思想を伝える書である。諸子百家のなかでも二十巻五十五篇、十余万言と大著である。思想史上では法家に分類され、法を根幹に据えた政治を行うことを説く書として認識される。具体的には、身分の如何に関わらず、理由の如何に関わらず法に基づいて賞罰を行う「信賞必罰」、発言と行動の一致を求めた「刑名参同」を主要な政治的手段とする。これらの政治的手段は戦国末期にあって存亡の危機に瀕していた祖国韓を救わんがため提出されたものである。したがって、その内容は極めて革新的であり強権的である。韓非はこの大胆な政治手段を韓王に進言したが、国家の危機を顧みず既得権のみを守ろうとする韓王の側近官僚の妨害に遭い採用されなかった。これによって韓非は一人憤りを感じることになる。ところが皮肉にも韓非が提唱した政治手段は当時の急進大国であった秦の王に支持されることとなり、秦王は韓非を秦で採用すべく韓に軍事的圧力をかけて韓非を秦に招かせた。ところが、韓非はそこでかつての学友で秦の宰相となっていた李斯の陰謀により自殺に追い込まれてしま

う。始皇一四年のことである。それから三年後韓は滅ぶ。

『韓非子』及び韓非の概略は以上の如くであるが、これから『韓非子』については乱世の書、改革の書、生き残る処方を説く書といったイメージが生まれ、韓非については、悲劇の改革者として後世の人々に記憶されることとなった。自国を救うための自説が自国では採用されず敵国の王に評価されるというジレンマや、かつての学友に結果的に殺されるというドラマ性の高さも『韓非子』及び韓非を二千年以上もの時間を超えて現代に生かしめている要因になっていると思われる。

現在学界では『韓非子』は「道法」思想との関わりという点で注目されているが、学界以外に目を向けると、社会人を対象とした所謂ビジネス書の分野で注目され出版されているのが注目される。[1] 中国古典の現代的意義というようなものは、たやすく扱うべき事柄ではないが、二千年の時間を超えてまでも現代ビジネス書が『韓非子』に見いだそうとしていることこそ『韓非子』の現代的意義といえるのではないだろうか。また、いつからビジネスの分野で『韓非子』が注目されるようになったのかも、日本人の『韓非子』観を知るうえで注意しなければならないことである。

そこで、本稿では『韓非子』の現代的意義、現代人の『韓非子』観を考察する前段階として、中国思想研究が漢学と称された頃の先哲達が『韓非子』の意義をどのように考え、またどのような『韓非子』観を抱いていたかを考察してみたい。[2]

幸い九州大学文学部にある『無求備斎韓非子集成』（一九八〇年成文出版社）の第六部に日本漢学者の手になる『韓非子』の注釈書が集められているので、今回その中の『定本韓非子纂聞』、『増読韓非子』、『韓非子翼毳』『韓非子解詁』の四冊を取り上げる。

本論

Ⅰ『定本韓非子纂聞』

蒲坂圓の『定本韓非子纂聞』をみてみる。

蒲坂圓の『韓非子』観は『定本韓非子纂聞』題言の冒頭にある次の言葉に集約される。

顧諸子中唯韓非書尤切世情能明是非。

（諸子百家の中でただ『韓非子』だけが世の中の実状にマッチしており物事の是非を明らかにすることが出来る）

蒲坂圓が『韓非子』をこのように評価する理由は、諸子百家の多くが自家の理念が先にあってそれを社会に認めさせようとするのに対して、韓非は社会及び時代の実状と要請をリサーチした上で自説を提出し、その実行を試みようとしたからであろう。韓非のこの姿勢が『韓非子』を実用の書として性質づけたといえる。蒲坂圓の『韓非子』観は『定本韓非子纂聞』の題言にある韓子総評の後文に詳しく見ることが出来る。蒲坂圓はそこで芥川丹丘の『韓非子』批判を引きそれに反駁を加えている。芥川丹丘は、古の聖人が情け深い政治を行って天下に仁を行き渡らせたことを賞賛した後、次のように言う。

申韓之徒、以忍人之心、立忍人之法、引繩墨、攻事情、循名責実、参伍不失。此可行乎一時富強之計、而非長世経国之道也。

（申不害・韓非などの法家者は、無情の心で無情な法律を作り、法律で物事を捕捉するように務め、発言を実際の行動でチェックし、参験参伍を徹底している。このような政治の方法は一時的には富国強兵が可能であるが、長期にわたって国を治める方法ではない）

これに対して蒲坂圓は、

愚謂不然。夫良医之徐甚病也、施劇剤。聖人之刑乱国也、用重典。公子生遭喪乱、宗国削弱、以為非富国強兵、無以供軍応敵也。非信賞必罰、無以塞邪止姦也。而世之飾仁義為迂弘、欲以治危乱垂亡之国者、猶之腐索而御駻馬也。其蹈徐偃燕含噲之轍必也。故曰時異備異。公子之言救時病之薬石哉。

（私はそうは思わない。そもそも名医が重病を治療する際にはやはり劇薬を投与する。それと同じで聖人が乱れた国を統治するときには厳しい法律を用いるのである。皇族であった韓非は戦国の世に生まれ、祖国は滅亡の危機に瀕しており、富国強兵策を取らなければ敵国と対峙できず、信賞必罰を用いなければ国内の悪行は止めようがないのである。それなのに、仁義を推賞し迂遠であるにもかかわらず今にも滅びようとしている国を治めようと言うのは、今にも切れそうな腐った手綱で荒馬を御するようなものである。必ず、徐偃王や燕王噲の二の舞になる。[3] だから韓非は言ったのである。「時代が変わると対応も変わる」と。韓非のこの言葉は当時の弊害を解決しようとしたいわば聖人の薬だったのだ）

と言い、韓非の生きた戦国という時代的要因、弱小国の皇族という生い立ちを鑑みれば、韓非が富国強兵や信賞必罰を主張するのは当然であり、時宜を得たものであるとし、韓非の思想の根幹をなす「時異備異」を引いて儒家的な仁義一辺倒では当時の時代には対応できなかったとしている。ただ、この蒲坂圓の反駁は芥川丹丘の『韓非子』批判に対して一見焦点が合っていないように読める。なぜなら、芥川丹丘は韓非の政治術を平時に長期的に用いることができないことを指摘したのであって否定したわけではなく、むしろ戦国の非常時には有効性を認めているからである。蒲坂圓の主張と相違はない。では蒲坂圓の反駁の真意はどこにあるのかを考えると、恐らくそれは、芥川丹丘が平時に儒家的政治理念で政治を行うことを最善と考え、韓非の乱世の政治術をあくまで次善の方法として捉える姿勢にあったと思われる。乱世よりは平時が望ましいことは言うまでもないことであるが、そのことと、つまりいつ用いられるかということと政治の方法論自体の評価とは無関係であるべきである。この点があいまいにされ不当に韓非の政治術

が低く評価されることを正そうとしたといえる。乱世の政治術とはいえ、時代の要請を見据えた政治術はきちんと評価されるべきだということを明らかにしたのである。もちろんそれは、蒲坂圓が韓非の政治術を高く評価していたからのことである。

蒲坂圓の韓非観は前述した如く、弱小の祖国を救うべく優れた政治術を確立した思想家といえるが、では、彼は『韓非子』という書物をどう捉えていたであろうか。現在ではほぼ定説ができあがった自著部分と後学の学説との分類については[4]、

除史遷所記及主道、揚権、解老、喩老、八説、八経、六反、八姦、説疑、詭使、顕学、難、等諸篇外、多為後人擬託附益。

（司馬遷の史記に記載されている孤憤、五蠹、内外儲、説林、説難、とその他、主道、揚権、解老、喩老、八説、八経、六反、八姦、説疑、詭使、顕学、難、以外は大部分が後の人によってつけ加えられたものである）

といって、かなり広い範囲で自著を考えている。なかでも『老子』を法家流に解した解老と喩老を自著に加えているのは『史記』韓非列伝に司馬遷が言う「其帰本黄老（韓非の根本は黄帝老子である）」によってのことと考えられ、『史記』に対する強い信頼の姿勢が窺え興味深い。自著部分の、即ち韓非の思想に当たる部分の実用性については

令読者択而用之則於治国乎何有。此諸葛亮何犯犴之所以各進其主也。

（もし『韓非子』を読む統治者が本当に韓非の思想を選択して実際に政治の場で採用したならば、国家統治に於いて何も問題は生じないであろう。だから、諸葛公明や何犴が『韓非子』を君主に勧めたのである）

と最大級の評価を与えている。この時、蒲坂圓が迷走を始めようとしていた当時の江戸幕府を念頭に置いていたかどうかわからないのが残念である。蒲坂圓の『定本韓非子纂聞』題言は太田方の『韓非子』を賞賛する言を以て結ばれている。題言に言う、

太田氏語予曰、大学衍義補引朱子曰、法家者流往々常患其過於慘刻。今之士大夫恥為法官。……不知明于五刑以弼五教。雖舜亦不免教之不従、刑以督之。懲一人而天下知所勧戒。所謂辟以止辟。雖曰殺之而仁愛之実已行乎中。……朱子之言与六反八説諸篇所説正同。朱子言之則為仁愛、韓子言之則為慘刻。其故何也。蓋濫于声誉者多而覈于情実者寡也。

（太田方氏は私にこう語った。大学衍義補が朱子の言を引用して言うには[5]、法家思想を標榜する者は往々にしていつも無慈悲で厳しすぎる弊害がある。それで今の士大夫たちは法官となるのを恥ずかしいことだと思っている。……しかしそれは法による刑罰をはっきりと示すことが儒教の教えを助けていることを分かっていない。あの舜でさえ民衆を指導するのに聞き入れられないときは刑罰で導いたのである。一人を罰して天下に自分を戒めるきっかけを与える。所謂「毒を以て毒を制す」ということである。だから一人死刑で殺したとしてもその刑罰には民衆に対しての仁愛が込められているのである、と。朱子のこの発言と『韓非子』の六反八説諸篇の主張とは正に同じである。しかしながら朱子がこれを言えば仁愛の発言とされ、韓非が同じことをいっても無慈悲だとされるのはなぜであろうか。思うに、世間一般の評判に流される者が多くて実状本質を見抜く者が少ないからである）

唐李靖対太宗曰愛説於先、威説於後、不可反是也。若威加於前、愛救於後、無益於事矣。……愚謂読韓子者能観先後弛張之用而体李衛公之心以行其術則其功豈止富国強兵已哉。予聞此論賛歎不止。因録于此。

（唐の李靖が太宗に言った[6]、賞よりも罰を優先するという順序を逆にしてはいけないという事は正しい。もし仮に罰を与えておきながら賞としてそれを許したならば、何事をなすにしてもうまくいかない、と。……私（太田）が思うに『韓非子』を読む者が何が緊急で何がまだ猶予があるのかを判断でき、かつ唐の李靖のような心構えでいることができた上で『韓非子』の政治術を用いたならば、その効果は富国強兵の実現以上のものが期待できる。私（蒲坂圓）は太田のこの話を聞いて深く賛嘆した。それで題言に録した）

太田方の発言からは『韓非子』が儒家の朱子と結果的に同じ主張であるにも関わらず色眼鏡で見られることに対しての不満が読みとれるが、ここで敢えて朱子を言うのはその不満の根底に寛政異学の禁によって異学とされたことがあったと思われる。「実状を見抜く者が少ない」という太田方の批判は恐らく寛政異学の禁を是とする者に向けられたものと言え、蒲坂圓は『韓非子』に対する太田方の賞賛もさることながらこの批判にも賛同したと考えられる。『韓非子』の政治術そのものについては、太田方は唐の李靖の言を引き、使用者に状況判断ができることと賞罰の前後を間違えないことという一定の条件を課して評価している。この点は何の条件も言わずに賞賛する蒲坂圓と異なるが賞賛の度合いは同じく最大級のものである。蒲坂圓は国家の統治に有効であるとしたが、太田方は『韓非子』を富国強兵の書として認識していたらしいことが窺える。しかし「豈に止に富国強兵のみならんや」といって含みを残したところに、当時の迷走を始めつつあった江戸幕府に対して『韓非子』の国家統治に対しても有効性があることを示そうとした意図があったのではなかろうか。そしてその点にも蒲坂圓は賛同したのではないだろうか。

Ⅱ『増読韓非子』

蒲坂圓の『韓非子』観は『増読韓非子』の題辞及び付録に見ることができる。『増読韓非子』は荻生徂徠の『読韓非子』に蒲坂圓が補って出版したものである。『増読韓非子』の題辞でも蒲坂圓は、

念諸子中、唯韓非書最切世用、能明事情。

（思うに諸子百家の中では、唯一『韓非子』だけが世の中の実用に合っており、世の中の実状に明るい）

といってやはり『韓非子』の実用性を明らかにしている。また、付録では、

論者以惨刻少恩擯韓子。余謂不然……

（『韓非子』の事を論じる者は『韓非子』を厳しすぎて情けが少ないとの理由で『韓非子』を退ける。しかしなが

ら私はそうは思わない。……）

といって『韓非子』に対する世間一般の批判に反駁を加える。反駁の理論は『定本韓非子纂聞』の題言とおなじで「時異備異」を主張している。『増読韓非子』は『定本韓非子纂聞』よりも先に書かれているので、両著の題言と題辞とを比較すれば蒲坂圓の『韓非子』研究の進展の具合が窺える。例えば、題言で『韓非子』には自著と後人の附益の部分が混在しているのでその点に注意して統治者が読めば国家統治に有効である言っているが、そこでは具体的な篇名を挙げているのに対して、題辞では、

書中上韓王者有之。故多感憤。秦人投時好而附益者有之。故多過激。使善読者独執此術不用其心、則於治国乎何有。此諸葛亮何犴之所以各進其主也。

（『韓非子』中には韓王に上奏した部分がある。だから感情が高ぶったり憤っている篇がある。また秦人が当時の風潮に合わせて『韓非子』につけ加えた部分がある。だから内容が過激な篇がある。もしそういったことをしっかり分かった上で『韓非子』を読むことができる者が『韓非子』の説く術を用いて、『韓非子』の不適当な部分を採用しなかったら国家統治に於いて何も問題は生じないであろう。だから、諸葛公明や何犴が『韓非子』を君主に勧めたのである）

のように、具体的な篇名は挙げられていない。このことから考えると、『増読韓非子』から『定本韓非子纂聞』の間に蒲坂圓の研究が進んだといえる。しかし、『韓非子』の有効性を保証する読書上の留意点では、題言では自著部分を重視し後人の附益した篇との区別に注意することしか言われなくなっていて、題辞に示した『韓非子』の自著部分でも感情的に書かれた部分は実際の政治には採用すべきではないことが省かれている。常識的に考えると題辞のほうが適切な注意点であり、蒲坂圓の研究が進んだ分、『韓非子』の実用への意識が薄められたのかもしれない。

『増読韓非子』の付録には『韓非子』の考証学的資料としての価値が述べられている。

多古事古言可以発経典之義者、朱子解易亦引此書以此故也。如之何其遠斥而高閣之。読者察諸。

（『韓非子』には古事古言が多くて、いまでは理解しがたくなった経典の意味が『韓非子』によって知ることができるものがある。朱子が易を解するときに『韓非子』を引用しているのはそのためである。だからどうして『韓非子』をないがしろにし読まないでよいであろうか。読者にはこのことを考えてもらいたい）

ここでも気になるのが引き合いに出される朱子である。付録が書かれたのが享和二年（一八〇二）であるから寛政異学の禁を経ている。朱子が『韓非子』を参考にしたと敢えて言うことの意味は、一見、朱子の名を借りて『韓非子』に権威付けを行おうとしているようにもみえるが、蒲坂圓が荻生徂徠の門下であり先生の著書に付録として書いている事を考えると朱子学に対して『韓非子』を含めた諸子学の優位性をアピールするねらいがあったと考えられまいか。そう考えると「読む者、諸を察せよ」という蒲坂圓の言葉は重く感じられる。

Ⅲ『韓非子翼毳』

次に、太田方の『韓非子翼毳』を見てみる。

『韓非子翼毳』は今、漢文体系に収録されていて日本人の『韓非子』の注釈書としては最もよく知られているものの一冊である。

『韓非子翼毳』の序に太田方は『韓非子』の特徴を簡潔に示している。

其為学也、原於道徳、貴乎無為、務在喩人主。

（韓非の学問は道徳に基づいて無為を尊び、その目的は君主を諭すことである）

この道家的なタームで表現される韓非観はやはり司馬遷の『史記』を受けてのものと思われる。『韓非子』の目的とした「君主を諭す」ことについては、具体的には、

夫人主之道、以群臣所陳言授之名、以其名責其形。形当其名、名当其形則賞。形不当其名、名不当其形則罰。故曰形名之学。

（そもそも人主の行うべきは、群臣たちの発言に責任を持たせ、その責任をもとに結果追求することである。発言と結果が一致していれば賞し、一致していなければ罰することである。だから、『韓非子』の学を形名の学というのである）

と言って、形名の学を挙げている。また、『韓非子』のもう一つの特徴である時代の要請によって政治術が異なるという考え方についても、

非儒術而倍先王絶文学而蝨詩書。其故何哉。壊乱異勢治術不同。古今殊時礼法不一。

（『韓非子』は儒家の政治術を否定し先王の教えを踏襲せず、机上の学問を否定し、詩経及び書経を社会の害だとした。それはなぜか。今の戦国の世は儒教の教えが通用した時代とは異なっており、当然政治術も異なっているからである。今と昔では時代が違い通用する礼や法は同じではあり得ないのである）

と言って、支持している。蒲坂圓とは違って直接的に国家統治に有効であるという口調で『韓非子』の実効性を挙げて賞賛することはしていないけれども、太田方も『韓非子』を高く評価していたことが分かる。しかし評価すればするほど、世間一般が儒教を尊び儒家の経典が流行するほどには『韓非子』が評価されていないという現実に不満を感じることになる。

夫縉紳先生先入于文雅之門、優游乎礼楽之場、漸積之後、初窺形名。故顚越乎峻厳、眩曜乎高嶷。前論為主後言見擯。学斯道者嫌乎少恩、修斯術者疑乎慘礉。以為妨於仁義而害於詩書。故鮮有敢為之注解焉者矣。

（官僚になる人たちは先ず文学の勉強から入り、次いで礼楽に親しみ、しばらくした後で形名の学に接することになる。だから形名の学の峻厳さに驚き、高嶷さに目を眩ませる。だから彼らは儒教を主となし法家の学をないが

しろにする。そしてしいて法家の形名の学を学んだ者でも、情けが少ないことを嫌い、また形名の学の実践理論を修めた者も厳しすぎると懐疑的になる。それで彼らは結局は『韓非子』は仁義を損なうものであり詩経書経の教えに有害であると思うようになる。だから、そんななかで敢えて『韓非子』の注釈を作ろうとするものは少なかった）

世間が『韓非子』を正当に評価しないからこそ自分で『韓非子』の正当性をアピールしたいという想いが多大な犠牲を周りの人間に強いながら『韓非子翼毳』を出版したエネルギーとなっていたように思われる。[7]

太田方の『韓非子』という書物に対する特徴的なものとしては、巻首の初見秦篇と存韓篇を『韓非子』から分離したことが挙げられる。その他の学者が『韓非子』の篇の構成について、自著部分かそれ以外か、韓非学派の作品かそれ以外か等について自説を表明しながらも、『韓非子』二十巻五十五篇という枠組みを崩さなかったのに対して、太田方はそれを敢えて行った。

此書已在韓子入於秦之前矣。何得首有初見秦存韓二篇哉。……又且二篇史官記事之体而非憤士著書之旨也。以是観之、此二篇蓋一時好事者或以二事冠書目以序韓子事、後人不弁列之篇目矣。今更附于巻端以難言為首篇。凡五十三篇。附二篇。

（『韓非子』は韓非が秦に入国する前に出来上がっていた。それなのにどうして初見秦篇と存韓篇が巻首にあり得るだろうか。……またこの二篇は歴史官が書いた文体であり、憤りに満ちた者の書くような内容ではない。これから考えると、この二篇はある時何者かが二つの話を『韓非子』の巻首につけて韓非の紹介としたものを後の人が弁別せずに『韓非子』の篇として加えてしまったものであろう。だから、いま改めてこの二篇を付録として難言を第一篇とする。『韓非子』五十三篇、付録二篇である）

現在では初見秦篇と存韓篇は『韓非子』に存在することに間違いなく疑問がある篇として扱われており、その意味で

は太田方の判断は英断である。しかしながら後に誰も太田方に追従しなかったところをみると、不評だったと思われる。篇の内容を吟味することと篇の構成に手を入れることとは学者の守備範囲の意識に微妙に関係するのであろう。

太田方は『韓非子翼毳』の跋のなかで、『韓非子翼毳』が生涯、未定稿であると述べている。それはそれで問題はないが、気にかかるのは、その例えとして朱子及び程伊川を引いていることである。

昔者朱晦菴為四書集注、晩尚改誠意章。程伊川作易伝以為終身未定。今以諏之資、修先秦之文。蓋棺猶且不定。

（かつて朱子が四書集注を作ったとき、晩年になってから誠意の章を改めた。程伊川も易伝を作ったとき死ぬまで未定のままであった。いま私は浅学なのに先秦の文章の注釈を作った。これもやはり死ぬまで未定である）

『韓非子翼毳』の序と跋に書かれた年号から考えると執筆にとりかかったのが天明三年（一七八三）であり書き上げたのが享和元年（一八〇一）である。間に寛政年間を挟んでいる。序では『韓非子』の時代認識の正しさを際だたせるために、

然世儒不知。妄託仲尼之跡、空言先王之法、口説堯舜之道、虚論湯武之義……。

（時代は変化したのに、世間の儒者はそれを分かっていない。妄りに孔子の教えに頼り、ひたすらに先王の法を主張し、口々に堯舜の道を説き、無駄に湯王武王の義を論じている）

といい、韓非の主張を賞賛するために韓非の主張を全面的に採用して書いたとは言えこれはどちらかというと儒家に対して批判めいているが、跋では朱子、程伊川に倣ったとするのは、やはり寛政異学の禁の影響であろうか。『韓非子』は当然異学である。その注釈書を世に出すには正学に対して配慮が必要だったのであろうか。興味深いことである。

Ⅳ『韓非子解詁』

次に、津田鳳卿の『韓非子解詁』を見てみる。

津田鳳卿の『韓非子』観は韓子綱領と后叙に見ることができる。津田鳳卿もやはり『韓非子』が時代の要請に応える実用の書だと認識し評価している。后叙に次のように言う。

顧韓子之為書、卑虚名貴実用務兵農擠蠹蝎排柢巇警時君。

（思うに『韓非子』は中身のない意見を退け実用を重んじ、富国強兵に務め国家にとって有害な官僚や他人を出し抜くことしか考えない者を擠排し時の君主を戒める書物である）

自古明王賢相用是都吁可一堂以通時務以助世法。

（昔から明主や賢相は『韓非子』を用いてひろく伝えて時の務めをこなし、世間に法をうまく行われるようにした）

また、韓子綱領でも、

蓋謂去害而後利可得立也。孰謂後恥格之教乎。

（思うに『韓非子』は先に有害な要素を取り除いてそうして初めて国家の安泰が保てるという考えである。どうして儒教に劣っているであろうか）

曰宰相当用読書之人……所謂書也者応先屈指於韓子矣。吾嘗曰韓子是避奸符、宜写一部置人主左右不断講読知蠹蝎所由暁狗虎所藉。使姦宄胆冷骨驚、不遑掩蔽将謀。故曰天下人君必読書。

（宰相には読書人を登用するのがよい。……所謂書物といえばまず『韓非子』を挙げるべきである。私は嘗て言ったことがある。『韓非子』は悪を遠ざけることを説く書物であるから、一冊書き写して君主の側に置き、いつも読み聞かせ国家にとって有害な者がどうやって君主に近づくのか、権力を手中に収めようとする者がどんな手段を使うのかを君主に分からせるべきである。そして邪な者たちを不安にさせ行動できないようにして君主が邪な

者たちへの対策に煩わされなくてもよいようにする。だから『韓非子』は天下の君主にとって必読の書なのである）

と言って、『韓非子』を君主の必読書としている。儒教への対抗意識も見ることができ、やはり諸子学を学ぶ者にとっては儒学との優劣の比較は相当意識されることであったと思われる。津田鳳卿が『韓非子』を実用の書として評価しているのは以上の如くであるが、具体的な評価内容はというと、形名の学であり賞罰である。韓子綱領に言う。

所謂刑名形名也。非謂重刑責名之謂也、参審言行之謂也。……為人臣者陳事而言。君以其言授之事専以其事責其功、功当其事、事当其言則賞、功不当其事、事不当其言則罰。是之謂刑名之学。西漢名臣如公孫弘晁錯輩皆講此学輔弼王室。

（所謂刑名とは形名のことである。重刑をもちいて職責を追求するということではなく、発言と行動の一致不一致を調べるということである。人臣は自分の考えを発言として君主に言う。君主はその発言を聞いて臣下に職責を与え、その職責を果たしたかどうかで功績をはかる。功績が職責に合っていて、果たした職責が最初の発言と一致していれば賞を与え、功績が職責と合っておらず、職責が発言と合っていないときは罰する。これを刑名の学と言う。前漢の名臣、公孫弘や晁錯[8]などはこの刑名の学を極めて王室を助けたのである）

天無春秋不能為歳、君無賞罰不能治国。人主善操無失則於治国乎何有。

（天に季節がなかったら一年を数えることが不可能なように、君主が賞罰を用いなかったら国を治めることは出来ない。君主が賞罰をしっかりと運用し賞罰の執行権を失わなかったら国家統治に何の問題も生じない）

このように見てくると津田鳳卿も他の学者と同じように『韓非子』を評価しているように感じられるが、津田鳳卿は韓子綱領で『韓非子』の性格上、常時用いるべき理論ではないことを指摘する。津田鳳卿は『韓非子』を、

教開国察主専依法術是教猱昇木也。

（創業の明主に『韓非子』の説く法術を用いるべきことを教えるのは猿に木登りを教えるようなものである）

嘗評非之言、有用于世。猶之取天下必用攻伐。撥乱之術不得不出于此。然而至其守成則有典謨在矣。

（嘗て『韓非子』の説は世の中に有用であると評価した。それは例えば天下を取る際に必ず武力を用いるようなもので決して穏やかに役立つものではない。乱れた世を正すにはそのように強権的にならざるを得ないのである。しかしながら、ひとたび成し遂げたあとは『韓非子』は必要なく書経の二典三謨のような儒家的な手法がよい）

と言って、創業及び撥乱反正に限定して有効な書物と定めている。そしてその性格上、説として行き過ぎている所があることも指摘する。

韓子之書多矯俗之説、其極激厲。夫矯箭者先反張其曲漸自帰直。若始直之而已則不日反曲。……戦国求効於目前。故往往有過炙至爆焦者。

（『韓非子』は世俗を矯正しようという説が多く、その内容は極めて厳しい。そもそも弓矢の曲がりを直す者はまず曲がっている方とは反対に曲げる。するとしばらくすると自然と真っ直ぐに戻る。もしはじめから真っ直ぐにしただけなら、すぐさま元通り曲がってしまう。……しかしながら戦国時代には結果をすぐに出さなければならなかった。だから『韓非子』の説には曲がった矢を直そうとして矢を火にあぶりながらあぶりすぎて燃やしてしまうというものがままある）

ただ、闇雲に『韓非子』を賞賛するのではなく冷静にみている津田鳳卿の姿勢が窺える。津田鳳卿の冷静な姿勢は『韓非子』と儒家的な書物とを対立的に捉えずに、『韓非子』は創業・乱世に、儒家的な教えは守成・平時に、とそれぞれの性質を踏まえて見ていることからも分かる。ただ、対立しないのみならず、津田鳳卿は『韓非子』は儒家の教えを否定してはおらず、本質は同じであるとする。

自不失其正語治則堯舜、云学則証孔子。韓子之其心可知也。然而掊仁義譏先聖、醒世激俗之一術。若老禅罵祖然。(9)

噫戦国所謂仁義絶非孔氏之旧也。

（何もせずに治まっているときには政治では堯舜を称え学問では孔子を学ぶのである。『韓非子』のこの本質を知らねばならない。そういう本質であっても『韓非子』は書中で仁義を攻撃し先聖を謗っているが、それは世俗に対する一つのショック療法である。禅士が達磨を謗ったようなもので本質的に否定はしていないのである。『韓非子』が否定する戦国時代の仁義は孔子のそれとは全く違うのである）

このように『韓非子』が否定した儒家は本当の儒家ではないので『韓非子』が儒家を否定したことにはならないとするのは、無理があるように思われる。これは津田鳳卿が当時の正学であった儒教に遠慮した或いは迎合しようとした現れともとれる。このことはつぎの朱子の引用にも通ずる。

朱晦翁云看文字須是猛将用兵。……読韓子者須倣良相意想而后僅得作者苦心。

（朱子は読書は猛将が兵を使うように行うべきだと言った。[10]……『韓非子』を読む者は優れた宰相が考えを巡らすのに倣ってはじめて少しだけ作者の苦心を知ることが出来る）

朱晦翁云老蘇只取孟子論語韓子与諸聖人之書、安坐而読之者七八年、後来倣出許多文字。

（朱子は言った、蘇洵は『孟子』『論語』『韓非子』と聖人の書を手に取り落ちついて座って七、八年かけて読んだ。その後で多くの著作を成したのである、[11]と）

蒲坂圓にせよ太田方にせよ、朱子の名を引く。この時期はやむを得ないことであったのかもしれない。

津田鳳卿の韓非個人についての評価も極めて高い。それは「申韓」と並称される申不害と韓非とを比べ評している部分が如実に示している。

人云申韓是以歳次論也。以予品隲二君子、申不害幸遇韓昭之講治……顧其押検、術数有余而至誠不足也。非子則兼用法術憂国著書。……乃知非子在韓、秦不易下手。可謂雄俊之宝臣。……功不在不害之下。

（人は申韓と言って申不害と韓非を時代順に並称する。ただ、私が二人を品定めするならば、申不害は幸運にも韓の昭侯の改革機運時に巡り合わせた。……しかし、申不害のしたことをまとめてみると術数に突出しており、誠実さに欠けている。[12] これに対して韓非は法と術とを兼用し祖国の危機を憂えてそのために書を著した。……韓非が韓にいると秦は韓を攻めにくかったことがわかる。韓非は雄俊な宝臣と言える。……韓非の功績は申不害に劣るものではない）

韓非の愛国心と敵国に評価されたという理論の正しさから考えて韓非が申不害よりも優れているとするのは当然のことであるが、それ以外に申不害が幸運だったことに対して韓非が時運、人運ともに巡り会わなかったことが津田鳳卿の評価にひいき目に影響を与えているように思われる。この韓非の悲劇性こそが『韓非子』を世に伝えた大きな要因でもある。

おわりに

本稿では、『韓非子』の現代的意義を考察するための前段階として、江戸期に著された四冊の『韓非子』の注釈書に現れた『韓非子』観及び韓非観をみてきた。やはり『韓非子』については実用書、世の役に立つ書として捉えられていた。そしてどの先哲達も『韓非子』が時代の変化に対応した書物であることと、抽象的理念ではなく具体的に「信賞必罰」「刑名参同」といった実行可能な政治術を説いていることとを賞賛する。『韓非子』に対して従来いわれてきた厳しすぎるという批判についても、『韓非子』にそのような性質があることは認めたうえで、時代の変化への対応、時代の要請に応えるという必要性から一蹴する。韓非観については悲運の愛国者という悲劇的イメージで一致している。それは体制に正当に評価されなかった、受け入れられなかった韓非を、寛政異学の禁の下での自らの現状と重ねて見ていっそう強固なものになったものである。当時、韓非は異学を学ぶ者達にとって精神的な支柱となって

いたのかもしれない。しかしながらそれでいて、必ず朱子を引くことから当時の諸子学者の微妙な立場が想像される。

先達の『韓非子』観及び韓非観は以上の如くであるが、キーワード的に纏めるならば、実用、信賞必罰、刑名参同、時代の要請に応える、愛国者、悲運、悲劇的結末といった具合になろう。これらを踏まえた上で次稿では、現代の実用面で『韓非子』が最も脚光を浴びているビジネス書を資料として『韓非子』の現代的意義と日本人の『韓非子』観及び韓非観の変遷を考察することにしたい。

註

（1）ちなみに丸善株式会社の和書・商品情報検索で『韓非子』を検索するとヒット五十二件中、十一件が『韓非子』の名を関したビジネス書である。（一九九六年七月一七日現在）なお検索に当たって丸善株式会社の深牧大氏にお世話になった。謝意を表したい。

（2）日本人の『韓非子』注釈書についての研究には、猪口篤志氏「邦人の韓非子研究について」（『東洋研究』二・三合併号一九六三年）町田三郎氏「二三の『韓非子』注について」（『九州大学川勝賢亮氏科研報告書』一九九二年）がある。参照されたい。

（3）徐偃は民を愛し戦闘を避けその結果自国を滅ぼした。『淮南子』説山訓に見える。燕噲は部下を信任しすぎて国が乱れた。『史記』燕召公世家に見える。

（4）現在では孤憤、説難、和氏、姦劫弑臣、五蠹、顕学が自著と目されている。

（5）巻百　総論制刑之義上にある。

（6）李靖については旧唐書巻六十七、新唐書巻九十三の列伝を参照されたい。

（7）『韓非子翼毳』の刊行までの困難は跋後の文に詳しい。

（8）公孫弘は『史記』列伝五十二、晁錯は『史記』列伝四十一に見える。

（9）潙山が徳山宣鑑を指して言った言葉に「呵仏罵祖（仏をしかり祖を罵る）」とある。『五燈會元』巻七　続蔵経二乙・十一・二・一一五・cに見える。現在では、過去の賢者よりもさらに優れようとする例えに使う。

（10）『朱子語類』巻十学四、読書法上に見える。
（11）『朱子文集』巻七十四、滄洲精舎論学者に見える。
（12）例えば、『韓非子』内儲説下六微に、「大成午、従趙謂申不害於韓曰、以韓重我於趙。請以趙重子於韓。是子有両韓、我有両趙」とある。